

柳宗悦『キリアム・ブレーク』(1914)の  
全集版(1981)との違いから浮き彫りになるその特性

和田 綾子

イギリスにおいてごく少数の同時代人の理解者を除いてはややもすれば狂人視された William Blake(1757-1827)の本国における受容史の中心に位置付けられるのは、Alexander Gilchrist である。彼は、1863年に *Life of William Blake, 2 vols.*を出して、<sup>1</sup> その後の編者の Ruthven Todd が表現したように「アマゾン川ほど広大で、支流を多く持つ大河(ブレイク研究)の源流」(Gilchrist, 1945, vii)となったのである。この非常に独創的な画家としてのブレイクの評価に対して、彼の異端性を深く理解した A.C.Swinburne は 1868年に *William Blake: A Critical Essay*を出して詩人としての評価を補完した。こうしたブレイク再評価の気運の中で、J.C.Hotten や William Muir らが、特にブレイクが意図した通りに詩と挿絵が一体化した彩飾本の形でかなり忠実なファクシミリを個々に製作している。<sup>2</sup> 1893年には、Edwin John Ellis と William Butler Yeats がブレイクの詩人としての全体像を本格的に提示しようとして、伝記と作品と作品解釈からなる *The Works of William Blake, 3 vols.*を出している。日本でブレイクが詩人として紹介されるのはこの 1893年以降のことであるが、<sup>3</sup>これは本国において数は限られてはいたが非常に熱心なブレイクの信奉者の存在と、彼らによるブレイクの作品の出版熱が高まったことに呼応するものに他ならなかった。特にイエイツは 1893年に単独でブレイク詩集の普及版(詩神文庫版)

を出しており、これは Lafcadio Hearn が東京帝國大学で 1899 年以降、少なくとも三度ブレイクについて講義するにあたって使用したテキストとなった(矢野,535)。更には、柳宗悦が Bernard Leach を介して入手したのはこの普及版であり、その中の『天国と地獄の結婚』を読んだことをきっかけとしてブレイクがついに忘れ得ぬ存在となったことは彼が自ら語っている事実である(柳 ix; 全 4,11)。<sup>4</sup>

日本におけるブレイク受容史は、白樺同人として活躍し、宗教哲学者、民芸運動の創始者として一般に知られている柳宗悦(1889-1961)を抜きにしては到底語れるものではない。日本のブレイク受容史における柳の重要さは、イギリス本国におけるギルクライストのそれに相当する。柳が二十五歳で出した七百五十頁を超える大著『キリアム・ブレーク』(1914)は、日本で最初の本格的なブレイク評伝である。これは、二元論の桎梏に喘いでいた若き日の柳がブレイクの思想にその解決の糸口を直感し、<sup>5</sup> 当時、信頼できるブレイクの全集版がまだ出版されてはいなかったがその方向へ確実に歩みを進めていた本国における可能な限りのブレイクの著作集を駆使して、彼の難解な預言書群は言うに及ばず、本国で出版された研究書のほとんどありったけを踏まえて書かれたものである。柳は当時のイギリスの最先端のブレイク研究を踏まえた上で、「ブレークに対する自分一個の理解を多く闡明し得た事を信じてゐる」(柳 xiv; 全 4,14)と述べている。私の最大の関心事は、この大著において柳が何をイギリスのブレイク研究に負っており、何が彼の独自の論考なのかであった。<sup>6</sup> この検討過程で明らかになったのが、『柳宗悦全集』第四巻(1981)所収の「キリアム・ブレーク」と柳が洛陽堂から出した『キリアム・ブレーク』(1914)との間のずれである。

『キリアム・ブレイク』が出版されて九十年が経つ今日においても特に外国文学の受容史が近年脚光を浴びる中、この大著が再び読まれる機会は以前よりも増している。今やブレイク研究上の古典となり少なくともその二巻中の第一巻のみは再版に再版を重ねているギルクライストの伝記も、G.E.Bentleyは原著をそのまま読むことは危険として Ruthven Todd の版（1945）を最上と見なした（BB,26,814-6）。それは、この版がギルクライスト以降のブレイク研究を反映し、細部まで丹念に事実を確認した上で詳しく注が補われ、よってギルクライストがまだ当時存命中のブレイクの同時代の友人達から提供されたとして掲載した情報等が驚くほど信頼できることを示す一方で、誤りは訂正したものとなっているからである。確かにブレイクの没後の約百年間、待望の Geoffrey Keynes による初の信頼できる全集版が出版された 1925 年頃までは、ブレイク研究書は今日の基準からは驚くほど変則的で、事実誤認も含まれていた。<sup>7</sup> しかし、イギリスにおけるブレイク研究の揺籃期の末に日本で書かれた柳の『キリアム・ブレイク』は、特に十九世紀に横行したブレイクの詩の編者による書き替えに反旗を翻した John Sampson の研究を反映しているが故に、ブレイクのテキストの誤りは音読する限り驚く程少なく、<sup>8</sup> 事実誤認も当時のブレイク研究を如実に反映するものであった。<sup>9</sup> 研究者が特に日本におけるブレイク受容史を紐解くとき、柳の原著は現在では稀少書となっているが故に原著に当たる代わりに全集版をもってその代わりとする可能性は高い。これによって手に入りにくい柳の大著に触れることができる恩恵はあまりに大きい。当時のブレイク研究と照らし合わせて詳細を検討する対象とするならば全集版では柳のブレイク研究水準

を誤解する恐れがある。というのは、その中では壽岳文章が表現した、柳の「真正にアカデミックな精確度」(全 5,629) がぼやけてしまっているからである。これは、ひとつには『キリアム・ブレイク』が『柳宗悦全集』の著作編二十二巻の内の一巻の一部として収められてしまったことでその一貫した編集方針の制約を受けたことにもよる。柳の原著をその全集版と比較することは、柳自身の「精確度」を改めて我々に認識させ、原著の特徴を浮き彫りにする。全集版と原著との最も大きなずれは柳が掲載したブレイクの挿絵をめぐるものである。

『柳宗悦全集』(著作篇全二十二巻、図録篇全五巻)は、1979年1月に日本民藝館と日本民藝協会によって立案され、1980年11月から筑摩書房より毎月刊行するというハードスケジュールの中でその大半が出版されたが、第二十一巻と第二十二巻の書簡集と補遺の難航により、完成したのは立案から十三年余り後の1992年5月となった大事業であった。その編集委員を委嘱されたのは壽岳文章、鶴見俊輔、水尾比呂志、柳宗理の四氏である。「日本民藝館設立五十周年記念出版『柳宗悦全集』の刊行に当たって」と題する文書の中の編集方針には「正確さを旨とする定本版」となることが目指され、「美しい本造りの範を示された先生の全集にふさわしい出来栄えを心掛けて、図録篇の写真印刷の清新精確さはもとより、本文収録の挿図に至るまで、細心に配慮」したことが述べられている(水尾, 月報 25,2)。『柳宗悦全集』第四巻(1981年6月刊行)は、「珍しく柳の加朱がなかった」(全 4,709)という柳所持の初版本を底本としている。しかし、それにおいても、柳が斎藤勇に負う所が多かったとして(全 4,625)雑誌『白樺』(第六巻第二号 [1915年2月])に掲

載した二段組六頁に渡る「正誤表」に従って柳の意図した通りに誤植を正し、それ以外の訂正を要する箇所は本文中においてではなく、校註において示すと言う慎重さを示している。柳の用いた難解な旧漢字も全て原著に極めて忠実に用いられていることは言うまでもない。

『柳宗悦全集』第四巻の編集協力者として校註と解説を担当し、校訂にあたったのは由良君美である。彼は校訂覚書に「年代考証その他についても、絵画を含め、校註のなかに今日の定説を示し」、挿絵については「原著からの最復刻を避け、今日のより優秀な複製または現物によって鮮明を期した」と述べている(全 4,629)。柳は原著に六十枚もの白黒の挿絵を入れている。そして、これらの内の十七枚は、1914年12月の原著出版の八カ月前に出版された雑誌『白樺』において、ブレイクの生涯と作品に係る柳の論文と共に掲載されたものと同様である。これらについて、柳は、「普通の複製から又複製した」(白樺第5巻4月号,572)として、印刷の悪さによって原画の評価を傷つけることを心配しながらも、「然し是等の挿画でブレイクの特質は明らかに示せると思つてゐる」(同)と述べて原著には更に多くの挿絵を掲載したのである。当時の柳の判断が決して誤ったものではなかったことは、白樺同人で小説家の里見弴が、半世紀以上後に過去を振り返り「あの頃の僕らっていうのは、乾ききった砂漠のように……複製版だって、白黒だって見ちゃあ感動した」(久守 170)と述べていることに明らかである。柳の原著における挿絵の扱いは、『白樺』における扱いとほぼ同様である。挿絵の印刷には活字用とは異なる紙が使用され、それに挿絵が白黒で写真印刷されている。挿絵の頁そのものには、頁数もその挿絵の題も何もつけ

られていない。ただ、読者は絵そのものに向きあうことが求められているだけである。頁には絵以外には何も印刷されていない為、紙面が絵のために最大限に利用されている。そして、興味深いことには、横長の挿絵は例外なく必ず本を横向きにして見るように配置してある。(そのままで収まる例外的な場合においても同様である。)

これは、勿論、限られた縦長の紙面において横長の挿絵を横向きに配置することでできる限り大きく紙面を利用するためである。絵の題は、絵の扉或いは保護のための薄紙の役割を果たしている直前の頁の中央に書かれている。一方、全集版の挿絵の掲載については、原著の「複製の複製」のさらなる複製を避けようとして「細心に配慮」し、「今日のより優秀な複製...から鮮明を期した」のである。しかし、全集版の著作篇の編集方針から、挿絵についても活字と同じ用紙が用いられ、由良が嘆いたように(全 4,629) カラーでなく白黒印刷となってしまったために明るい色彩が白んでしまって、ブレイクが最も大切にしたアウトラインと詳細が多少なりともぼやけてしまった。<sup>10</sup> さらには、絵の日本語名、英語名、頁数と欄外見出しの全てが挿絵の頁に収められてしまったので挿絵そのものは原著よりもほとんどにおいて縮小されてしまっている。特に影響が顕著なのは横長の挿絵で、これは全て正面から見るように配置されたことで縮小されただけでなく、良く見ると端が切れていて全体の縦横の比率を正しく伝えていないばかりか大切な絵の一部を失っているものもある。<sup>11</sup>

これらの問題は実はごく表面的なものに過ぎない。全集版に用いられた挿絵に関する本当の問題とは、柳が選んで掲載したブレイクの特定のデザインを他の時期に製作された版本と置き換えてしまっ

ていることで、編集当時の年代考証が反映されるどころか、製作年と扱われている作品の厳密さにおいて、柳の「真正にアカデミックな精確度」を弱めてしまっていることである。それぞれの版本の違いは、デザインを銅版にエッチングする過程か、それを印刷する過程か、或いは彩色する過程の三段階で生み出されている。そして、それぞれの版本には、まず最初の持ち主がおり、様々な人の手から手に渡り、多くは図書館や博物館に所蔵されるという歴史を背負っている。柳は、少なくとも版本の違いや、あるデザインが最初は誰のもので現在はどこに所蔵されているかという情報に敏感であった。このことは、彼が書いたブレイク展覧会カタログにも示されている（全 5,130-47）。

以下で試みたのは、原著と全集版において違いの顕著な十四枚の挿絵のそれぞれの版本の特定である。勿論、ブレイクの同じ作品の異なる版は英米を中心にして世界に点在しており、全てが複製されているわけではないので、どの版本の複製かの特定が困難だったものもある。又、原著の挿絵も全集版の挿絵も白黒印刷であるため、それらとカラー印刷の複製との照合はやや困難を伴ったが、おそらく、ブレイクの前画が単色版であればよほど印刷が鮮明でなければほとんど判別がつかなかったであろうものが、カラー版であったことによって、一作品ごとに微妙ながら明らかな特徴があり、それを手掛かりとして、どの版本からの複製かをほぼ特定できたと考えている。以下に示したのは、原著における作品番号と英文タイトル及び製作年（特に必要な場合は現在の名称）、原著と全集版の挿絵の前画の版本の特定と所蔵場所、同一の作品が掲載されている資料と備考である。（実際に異なるのは十四枚中の十三枚である。）

## II. The Ancient of Days Striking the First Circle of the Earth

1827

原著 ウィットワース・インスティテュート (マンチェスター大学)

(1824/1827) (Butlin, cat. 271; Bindman, fig. 655)

全集版 ウィリアム・ミュアによるファクシミリ版 (1887)

(Butlin, cat. 268)

原著で論じているのは、ブレイクが、Frederick Tatham から注文を受けて亡くなる間に仕上げた作品である。全集版の挿絵に使われているのは、ケインズが所蔵し、1794年頃に仕上げられた作品と長く信じられていたが R.N.Essick がミュアによる複製であることを 1983年に明らかにしたものである (Essick[1983] 258-260; *BBS*, 67)。1977年の時点では、前者は F 版、後者は C 版と呼ばれていた (*BB*, 109-10)。

## III. Joseph of Arimathea Among the Rocks of Albion 1773

原著 少なくとも 9 枚存在する同じ版 (第 2 ステート, c.1810 -

1820) の一枚でその中の版の特定は困難。柳の挿絵は

A.G.B.Russell の『ウィリアム・ブレイク版画集』からの複製である可能性が高い。両者は大きさがほぼ一致し、人物の左足の爪先に偶然現れた白点が奇妙に一致している。ただし、ギルクライストの *The Life of William Blake* の 1907 年版の編者となった W.Graham Robertson は、当時 G 版を所有しており、その複製を同書に掲載していたため、(*BBS*, 90) 柳がそこから挿絵を複製していれば G 版となる。

(Robertson[1907], p.20 或いは Russell[1912], plate 2)

全集版 A版 フィツウィリアム博物館（ケンブリッジ）

（第1ステート 1773） （Essick, fig.1）

柳が取り上げた作品は、ブレイクが15～16歳の徒弟時代の作品を後年になって大幅に修正を加えたものである。原画に1773年とあることから、ラッセルが1773年としたものを柳が受け入れたのである。1773年時点のデザインは全集版に取り上げられた通りだが、この徒弟時代の作品に柳が「深いゴシックのテムペラメント」（柳35;全4,34）を看取したかどうかは疑問である。エシックは、このブレイクの修正を「技術的には有能でも退屈で平坦な徒弟時代のプレートを強力な芸術作品であり彼のより重要な宗教的、美的信条を表現するものに変えた」と評している（Essick,8）。

IV. Glad Day 1780 （Albion Rose）

原著 C版 大英博物館（ロンドン）（c.1794-1796）

（Russell[1912], plate 1）

全集版 C版 大英博物館（ロンドン）（c.1794-1796）

（Essick, colour plates, fig.1）

原著の複製は、恐らくラッセルからの複製で大変暗く、一見して全集版と同じ作品の複製には見えない。しかし、この違いは大英図書館の版画と絵画部門で力量を発揮した Stanley William Littlejohn によって1904-1917年の間にこの絵の修復作業が成功裏に行われたことによるものである（Binyon and Colvin, 16-19; Russell [1912], 55; Essick[1983], 24）。原著に掲載されているのはこの絵の修復前の状態であったと考えられる。

## VII. Shepherd from 'Songs of Innocence' 1789

(Frontispiece to 'Songs of Experience')

原著 『無垢と経験の歌』 T本<sup>1,2</sup>

大英博物館 (ロンドン)

(William Blake Trust, vol.2 [1991] fig.6)

全集版 『無垢と経験の歌』 Z本(1826) 第28プレート

米国議会図書館 (ワシントン)

(William Blake Trust[1955]; Blake archive, plate 28)

## VIII. Infant Joy from 'Songs of Innocence' 1789

原著 特定が困難。(これも『無垢と経験の歌』 T本[T<sup>2</sup>, 1815年] 大英博物館[ロンドン]か?)

全集版 『無垢と経験の歌』 Z本(1826) 第25プレート

米国議会図書館 (ワシントン)

(William Blake Trust[1955]; Blake archive, plate 25)

## IX. Title Page of 'The Book of Thel' 1789

原著 『セルの書』 D本 (c.1790)

大英博物館 (ロンドン)

(Muir[1884]; Sampson[1913], 240)

全集版 『セルの書』 O本 (1818年) 第1プレート

米国議会図書館 (ワシントン)

(William Blake Trust[1965]; Blake archive, plate 1)

## XIII. The Accusers: Or, Satan's Trinity 1794

原著 G版(1793-1796) (第2ステート)

大英博物館 (ロンドン)

(Essick, colour fig.2)

全集版 B版(1793) (第1ステート)

これは、元々『天国と地獄の結婚』B本口絵で、「我々の終わりが来た」と題されているものである。

ボードリアン図書館 (オックスフォード)

(Bindman, fig.81; Essick, fig.17)

#### XIV. The Tiger from 'Songs of Experience' 1794 (The Tyger)

原著 『無垢と経験の歌』T本(T<sup>1</sup>, 1795)

大英博物館 (ロンドン)

(William Blake Trust, vol.2 [1991] fig.7)

全集版 『無垢と経験の歌』Z本(1826) 第42プレート

米国議会図書館 (ワシントン)

(William Blake Trust[1955]; Blake archive, plate 42)

#### XVII. Bromion's Cave from 'Visions of the Daughters of Albion'

1793

原著 『アルビオンの娘たちの幻想』A本(1793) 最終プレート

大英博物館 (ロンドン)

(Muir[1884]; Bindman, fig.143)

全集版 特定が困難。ただし背景の雲の形等に関するベントレーの詳細な描写(BB,468-69)から I本[1793, イェールセンター・フォー・ブリティッシュアート (イェール大学)]か？

## XVIII. Frontispiece to 'America: A Prophecy'(1793)

原著 『アメリカ ひとつの預言』H本<sup>13</sup>(1793) 第1プレート  
大英博物館 (ロンドン)

(William Blake Trust, vol.4 [1995], plate 1)

全集版 『アメリカ ひとつの預言』M本(c.1807) 口絵

イェールセンター・フォー・ブリティッシュアート (イェール大学)

(William Blake Trust [1963])

柳はミュアによる『アメリカ』のファクシミリ版(1887)を持っていたが原著の複製にはそれを使用していない。ミュアは『アメリカ』R本を参考にして、その複製に『アメリカ』A本(彩色版)を真似て色を施した(Essick, 1989, 142)。柳が原著の複製に選んだのは彩色されておらず線刻が明瞭な方である。全集版用に選ばれたM本は彩色版である。

## XIX. A Page from 'America' 1793

原著 『アメリカ ひとつの預言』H本(1793) 第9プレート  
大英博物館 (ロンドン)

(William Blake Trust vol.4 [1995], plate 9)

全集版 『アメリカ ひとつの預言』M本(c.1807) 第7プレート

イェールセンター・フォー・ブリティッシュアート (イェール大学)

(William Blake Trust [1963])

## XX. Blight in the Corn from 'Europe: A Prophecy' 1794

原著 ギルクライストの 1880 年版『ブレイクの伝記』中の  
W.J.Linton による『ヨーロッパ ひとつの預言』の第 12  
プレートの複製。

(Gilchrist 1880, 124; Robertson, 130; Viscomi, fig.222)

全集版 恐らく複製者による大まかな複製。数少ない『ヨーロッパ』  
の単色版と比べても詳細がかなり異なっている。文字もブ  
レイクのものとは異なる。

## XXII. Los Howling from 'The Book of Urizen' 1794

原著 『ユリゼンの第一の書』D 本 (1794) 第 6 プレート  
大英博物館 (ロンドン)

(William Blake Trust, vol.6 [1995], 73)

全集版 『ユリゼンの第一の書』B 本 (c.1795) 第 8 プレート  
ピアポント・モーガン図書館 (ニューヨーク)

(Bindman, fig.193)

## XXIII. Los, Enitharmon and Orc from 'The Book of Urizen' 1794

原著 『ユリゼンの第一の書』D 本 (1794 年) 第 19 プレート  
大英博物館 (ロンドン)

(William Blake Trust, vol.6 [1995], 99)

全集版 『大図版集』A 本 (1794-1796)  
(『ユリゼンの第一の書』第 21 プレート)  
大英博物館 (ロンドン)

(Bindman, fig.317; Butlin, cat.262 3)

二つのデザインにおける大きな違いはエニサーモンの表情である。前者には原著の「心の憂愁」(柳 191; 全 4,140) が表現されているが、後者に現れているのは不吉さである。(ただし、両者の相違はエニサーモンにこの両面があることを示している。)

柳の原著とその全集版に用いられた挿絵の比較から浮かび上がってくる前者の特性とは何であろうか。原著に掲載された上述の十四枚の挿絵のブレイクの原画はその大半が大英博物館所蔵のものか、少なくとも英国にとどまっているものばかりである。また、一つの彩飾本の作品から複数のデザインが選ばれている場合は、『アメリカ ひとつの預言』と『ユリゼンの第一の書』に関する限り、同じ版本が使用されていることがわかる。更には、当時としては最も優れたファクシミリを出していたミュアの『アメリカ』と『ヨーロッパ』を柳は所有していたにも拘らず、原著の挿絵には利用していなかった。このことから考えられるのは、原著を出す時点ではこれらを持っていなかったか、或いは、柳の審美眼にかなったのがこれらの作品の単色刷りの他の版本の複製で、柳はそれらを敢えて選択したということになる。スウィンバーンは 1868 年に出した『ウィリアム・ブレイク』に八枚のブレイクの作品からの挿絵を付けているが、その際に「大英博物館当局が所有している版本からの複製を許さなかった」のでファクシミリリストによる複製から挿絵を複製したことを明らかにしている。現在でも、全てではないがブレイクの彩飾本の様々な版本がインターネット上で参照できるブレイク・アーカイヴの中に大英博物館の版本は入っておらず、当館所蔵のブレイクの作品からの複製は、昔に劣らず難しいことを物語っている。こ

うした状況下での柳のブレイクの作品を見ることの情熱と喜び、そして、それを広く分かち合おうとする気持ちは常人の到底及ぶところではなかった。これは、彼が1914（大正3）年4月の『白樺』に初めてブレイクの絵を掲載したことに見られるだけではなく、ブレイクの複製画による展覧会を1915年、1919年、1927年に開いており、<sup>14</sup>複製画を所望する個人の為にロンドンの出版社のFrederick Hollyerから直接、複製画を輸入する労を取っていたことにも明らかである（全5,153-56）。ロバートソンは、ギルクライストの伝記を1907年に再版した際に、彼が当時所有していた多数のブレイクの原画から二十三点を含む、四十四頁もの写真複製によるブレイクの作品の挿絵を入れている（Robertson, xxi-xxii）。柳が原著に掲載したブレイクの挿絵は、本の表紙の『アルビオンの娘たちの幻想』からのデザインも含めると、二十二点がロバートソンと同じものである。また、ラッセルは『ウィリアム・ブレイクの版画集』（1912）の中に三十二頁のブレイクの作品を掲載している。彼が1906年に出した『ウィリアム・ブレイクの書簡集』の口絵のブレイクのライフマスクの挿絵を含めると、柳の十二点の挿絵がラッセルと同じものである。ロバートソンとラッセルの挿絵の重複を考慮しても、柳の六十頁の挿絵の約半分を両者の挿絵に負っていることは明らかで、これが「普通の」複製から複製したと言うことの意味であると考えられる。

柳のブレイクに対する溢れんばかりの情熱は原著において多角的に示されている。実にこれは、末期とは言え本国のブレイク研究の揺籃期における変則性をとどめるものである。この多角性は、原著が収められていた箱と四枚目の題扉に『彼の生涯と製作及びその思

想』とするその副題に明らかであった。つまり、柳の著書は、ブレイクの人と作品と思想を紹介するための彼の詳細に渡る伝記であり、著作集の役割も果たし、画集でもあると同時に「東洋的汎神論」思想を解き明かす研究書であり、解説付の優れたブレイク研究書誌を兼ねていた。柳の他の作品と由良の解説と水之尾の解題を含む『柳宗悦全集』第四巻においては、本全体の題としての原著の副題、日本語の挿画目次、英語の索引はやむなく削除されており、原著の伝記、画集、著作集としての個性は弱められている。特に原著の索引は著作全体のキーワードをアルファベット順に挙げているだけでなく、Blake, Williamの項目の下には、大きく分けて、彼の生涯、絵と版画の英文名、全著作集の目次にも似た細かい作品配列の三分野があり、いずれの情報もすぐに引き出せるようになっていた。最新の研究を踏まえた伝記と画集と全著作集がある現代においては、柳の著書にそれらの情報を頼らなければならない読者はもはやいない。しかし、日本のみならず英国におけるブレイク受容史における柳の著書の歴史的意義と彼の真のアカデミズムを正確に伝えるのは、今のところ柳の原著を除いて他にはない。

## 註

1. ギルクライストは 1861 年 11 月に猩紅熱で急逝しており、当時、第一巻（伝記）は既に印刷に入っていたが、第二巻（著作と絵・素描カタログ）は、妻の Anne Gilchrist, 友人で画家の Dante Gabriel Rossetti, 彼の弟で詩人の William Michael Rossetti の編集協力の下で出版された。1880 年版もこの三者の編集協力による。
2. J.C.Hotten は、『天国と地獄の結婚』を 1868 年にカラーで出版し、William Muir とその家族は全て手彩色で、1884 年に『無垢の歌』、『セルの書』、『アルビオンの娘たちの幻想』、1885 年に『経験の歌』、『天国と地獄の結婚』、1886 年に『自然宗教はない』、『ホメロスについて』、1887 年に『アメリカ』、『ヨーロッパ』、1888 年に『ユリゼンの書』、『楽園の門』、1890 年に『ロスの歌』を出している(Bentley, *Ells & Yeats*, 1973,4)。
3. 山田美妙(1868 - 1910)の『万国人名辞書』(1893)にブレイクの名前が紹介されたのが最初とされている (*The Catalogue of the international Blake Conference*, 11)。
4. 柳の『キリアム・ブレイク』(1914) 原著書及び全集版への言及は、前者は「柳」とその頁数で、後者は「全」とそれに続く二つの数字（巻数と頁数）でなされている。
5. これは、当時、北京に移っていたバーナード・リーチへの柳からの手紙（1915 年 11 月 8 日）に表現されている（全 21 上、672）。
6. これについては、'Blake's Oriental heterodoxy: Yanagi's perception of Blake'として、国際ブレイク学会（2003 年 11 月 29 日、於京都大学）で既に発表済みである。
7. 最も顕著な例は、エリスとイエイツが、ブレイクの祖父がアイルランド人であるとして彼のアイリッシュの血筋を主張したことである (Ellis & Yeats, vol.1, 2-3)。
8. 全集版の校訂者の由良君美はかなりの精力を柳のブレイクからの引用の正確さの点検に注ぎ、そのほとんどに校註をつけてケインズの *The Complete Writings of William Blake*(1957)からの同箇所引用を繰り返しているが、この両者の違いが特に句読点 (punctuations) の有無と大文字と小文字の違いで、音読すれば全く変わらない場合は、その必要があったかは疑問である。それは、ケインズが 1925 年の全集版以来、特にブレイクの特異な句読点をそのまま印刷すれば意味があいまいになるとして恣意的な編集を施しているからである (Keynes, 1957, xiii-xiv)。 Sampson でさえ 1905 年版においてはブレイクの原文に極めて忠実であったが、彼のより多くの作品を収録しより広い読者を対象とした 1913 年版になると、1905 年版の編集方針を変更してブレイクの句読点や綴りにすら編集作業を施している(Sampson, 1913, xvi)。柳が Sampson の 1913 年版から引用すると断っておきながら彼の 1905 年版や他の版にも色々と当たっているのはこの辺の事情によるのであろう。1965 年には D.V.Erdman はブレイク独特の句読点をも再生する信頼できる全集版を出していたので、アードマン版ならば引用する意味があったであろう。また、由良は柳のブレイクの後期預言書（『四人のゾア』、『ミルトン』、『ジェルサレム』）からの引用に対する「今日の読み」として、ケインズからではなく、わざわざ、より古い 1927 年出版の D.J.Sloss と J.P.R Wallis の *The Prophetic*

*Writings of William Blake* を「柳氏の意図に沿う信頼できるテキスト」(全 4,646) として引用している。

9. 例えば、柳の挿絵VIIの『経験の歌』(1794)の口絵が誤って『無垢の歌』(1789)とされているのは、1880年版のギルクライストの伝記に新しく加えられた同じデザインからの複製の絵がINFANT JOY(Gilchrist, 1880, 68)と誤って題をつけられていたので挿絵が『無垢の歌』からであると柳が誤解したのであろう。また、彼の挿絵IIIでは、後年の「アリマセアのヨセフ」を1773年としているのも、挿絵LVIの「サタンを踏める基督」をブレイク最晩年の作としているのも当時のラッセルによる最新の研究(Russell, 1912, 53, 118)を踏まえていたためである。
10. 例えば、挿絵IIのコンパスを持つ人物を取り巻く円の輪郭、挿絵IVの両手両足を広げる若者の体の輪郭、挿絵VIIIの喜び(ジョイ)と言う名の幼子の輪郭が、原著では明確であるが、全集版でははっきりしない。
11. 全集版で挿絵そのものの横或いは縦幅が明らかに減じられているのは、挿絵(アラビア数字で)10、15、17、24、26、27、28、29、30、32、33、36、37、45、47である。その内、ブレイク受容史で最も鍵を握る45(Chaucer's Canterbury Pilgrims)のデザインにおいては、左端の二人の人物が失われている。
12. 大英博物館所蔵の『無垢と経験の歌』T本は、ベントレーによれば、『無垢の歌』F本(pls.6,7,19,24)(1789)と『経験の歌』T<sup>1</sup>本(1795)と『無垢と経験の歌』T<sup>2</sup>本(1815)の合本である(BB, 421;BBS, 125)。ただし、このプレート28は、『無垢と経験の歌』J本から来ていると考えられている(BB, 416)。
13. 柳の挿絵XVIIIとXIXは『アメリカ』の同じ版本の複製の複製と考えられる。大英博物館は『アメリカ』のF本も所有しており、F本の可能性もあるが、その挿絵XIXと同じ頁には、同館による取得年月日を示す印が押してあることから、H本と判断した。
14. 1915年には、東京の日比谷美術館と京都府立図書館で他の芸術家の作品の複製と共に(全4,106-7)、1919年には、9月に信州の7箇所(全5,129)で、そして11月には東京(流逸荘)と京都(帝大基督教青年会館)でブレイク展を開き(全5,148)、1927年には、壽岳文章と山宮允と共に12月に恩賜京都博物館で『百年忌記念ブレイク作品文献展覧会』を開いている(全5, 279-80, 639)。

#### Works cited

##### <邦文献>

- 久守和子 「ブレイク受容の一段面ーバーナード・リーチ氏に聞く」, 『ウィリアム・ブレイク』, 牧神社, 1977, 168-179.
- 水尾比呂志 『柳宗悦全集』の完結に当たって『柳宗悦全集』著作篇, 第22巻下, 月報25(1992.5), 1-4.
- 「白樺」第5巻4月号(大正3年[1914]4月1日発行) 1-576.

柳宗悦 『キリアム・ブレーク 彼の生涯と製作及びその思想』 洛陽堂 1914.

----- 『柳宗悦全集』(著作篇 22 卷, 図録篇 5 卷) 壽岳文章, 鶴見俊輔, 水尾比呂志、柳宗理編, 筑摩書房, 1980~1992.

矢野峰人 「ブレイク移入史覚え書」, 『英語青年』CIII (1957) , 535-36.

Bentley, G.E.Jr. *Blake Books, Annotated Catalogue of William Blake's Writings in Illuminated Printing, in Conventional Typography and in Manuscript and Reprints thereof, Reproductions of his Designs, Books with his Engravings, Catalogues, Books he owned and Scholarly and Critical Works about him*, Oxford, Clarendon Press, 1977. Cited as *BB*.

----- *Blake Books Supplement, a Bibliography of Publications and Discoveries about William Blake (1971-1992) being a Continuation of 'Blake Books' (1977)*, Oxford, Clarendon Press, 1995. Cited as *BBS*.

Bindman, David. ed., *The Complete Graphic Works of William Blake*, assisted by Deirdre Toomey, London, Thames and Hudson, 1978.

Binyon, Laurence and Sir Sidney Colvin, 'The Late Stanley William Littlejohn', *Burlington Magazine*, 32 (1918), 16-19.

Blake, William. *Songs of Innocence and of Experience*, Clairvaux, Jura, published by the Trianon Press for the William Blake Trust, 1955.

----- *America: a Prophecy*, ed. Arnold Fawens, Clairvaux, Jura, published by the Trianon Press for the William Blake Trust, 1963.

----- *The Book of Thel*, Clairvaux, Jura, published by the Trianon Press for the William Blake Trust, 1965.

----- *William Blake: Songs of Innocence and of Experience*, ed. with introduction and notes by Andrew Lincoln, Blake's Illuminated Books, vol.2, general editor, David Bindman, London, Tate Gallery and the William Blake Trust, 1991.

----- *William Blake: The Early Illuminated Books*, ed. with introduction and notes by Morris Eaves, Robert N.Essick, Joseph Viscomi, Blake's Illuminated Books vol.3, general editor, David Bindman, London, Tate Gallery and the William Blake Trust, 1993.

----- *William Blake: The Continental Prophecies*, ed. with introduction and notes by D.W. Dörrbecker, Blake's Illuminated Books, vol. 4, general editor, David Bindman, London, Tate Gallery and the William Blake Trust, 1995.

----- *William Blake: The Urizen Books*, ed. with introduction and notes by David Worrall, Blake's Illuminated Books, vol. 6, general editor, David Bindman, London, Tate Gallery and the William Blake Trust, 1995.

----- *The William Blake Archive*, ed. Morris Eaves, Robert N. Essick, and Joseph Viscomi, 22 January, 2004, <http://www.blakearchive.org/>.

- Butlin, Martin. ed., *The Paintings and Drawings of William Blake*, 2 vols., New Haven, Yale University Press, 1981.
- Ellis, Edwin John, and William Butler Yeats. ed., *The Works of William Blake, Poetic, Symbolic, and Critical*, 3 vols., London, Quaritch, 1893, with introduction by G.E.Bentley, Jr., New York, AMS Press, 1973.
- Essick, Robert N. *The Separate Plates of William Blake: a Catalogue*, Princeton, Princeton University Press, 1983.
- . 'The Resurrection of *America Copy R*', *Blake: An Illustrated Quarterly* 21 (1989), 138-42.
- Gilchrist, Alexander. *Life of William Blake*, 'Pictor Ignotus.' With Selections from his Poems and Other Writings, 2 vols., London, Macmillan, 1863, a new and enlarged edition, 1880.
- . *The Life of William Blake*, ed. W. Graham Robertson, London, John Lane, 1907. (Cited as Robertson)
- . *The Life of William Blake*, ed. Ruthven Todd, London & N.Y., 1942, revised with additional notes, 1945.
- Goto, Yumiko, and Kozo Shioe, *The Catalogue of the International Blake Conference, 'Blake in the Orient'*, The Blake Conference Committee, 2003.
- Keynes, Geoffrey. *The Complete Writings of William Blake, with all the variant readings*, Nonesuch Press, 1957.
- Russell, Archibald G.B. *The Letters of William Blake together with a Life by Frederick Tatham*, London, Methuen, 1906.
- . *The Engravings of William Blake*, London, Grant Richards, 1912.
- Sampson, John. *The Poetical Works of William Blake, Including the unpublished 'French Revolution' together with the Minor Prophetic Books and Selections from 'The Four Zoas', 'Milton' and 'Jerusalem'*, London, Oxford University Press, 1913.
- Swinburne, Algernon Charles. *William Blake: a Critical Essay*, London, J.C.Hotten, 1868.
- Viscomi, Joseph. *Blake and the Idea of the Book*, Princeton, Princeton University Press, 1993.
- Yeats, William Butler. *Poems of William Blake*, The Muses' Library, London, Laurence and Bullen, 1893.